

楽しい田舎暮らし

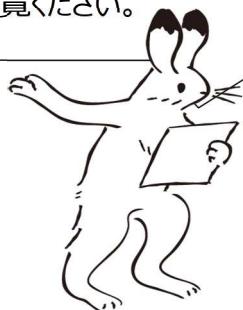
大日堂の謎の掛け軸解明（24年6月20日）



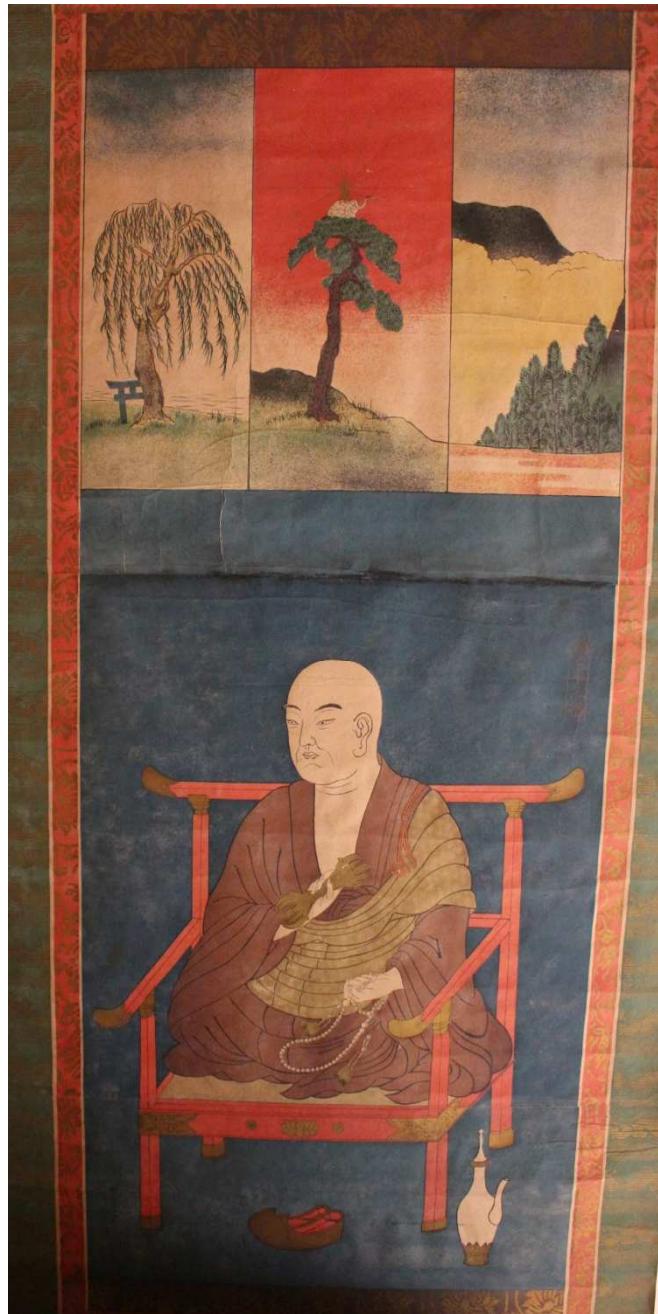
中はこんなふうです。時々区長が寝ています。うそです。



今回、右に掛かっている掛け軸の謎に迫ります。大作ですのでパソコンでご覧ください。



押山大日堂の掛け軸の絵解き



豊田市押山町の大日堂は大日如来の他に明治初期に廃寺となったお寺の仏像仏具・三十三観音を祀った興味深いお堂である。(右画像)

ここに左の掛け軸があるが、僧は空海だとわかるものの、頭上の三つの絵の意味は不明となっていた。ネットでの検索では、右下の画像のように空海の頭上に天蓋か梵字があるものが一般的で絵は稀だった。しかもその中にこれと同じデザインの絵は見あたらなかった。仏像関係などの専門家の方々にも聞いてみたが「この絵は見たことが無い」とのことでの調査は行き詰った。

とはいってこの絵は空海に関する出来事を描いているのは間違いない。ならば空海の足跡をたどるのが近道だろうと考え、23年に北川宥智氏（高野山真言宗高家寺住職）の「弘法大師（空海）の生涯」6回講座を受講した。北川氏は高野山大学大学院で密教学を修められた方である。



ここで空海の事績や伝承に触れた結果、中央と右の絵についてはほぼ解明できた。左の画については丹生都比売大神が空海に高野山を授けたことを示していると思ったが、木の陰に鳥居が半分隠れているような構図の意味がわからなかった。そこで北川氏に掛け軸の画像を見せて私の見解と疑問をお伝えした。氏もこの絵は見たことが無いとのことだったが、私の解釈でよいと言われた。また、左の画の木は柳であり聖なる木だとご教示いただいた。ただし柳や鳥居の構図の意味はさらに検討すべきとのことだった。

今回、その後に考えたことも含めこれら3点の絵の解釈を述べてみようと思う。なお本題に入る前に指摘しておきたいのは、3点の絵は弘仁7年（816年）4月・5月・6月の連続した高野山開創のストーリーらしいということである。このころ空海は新たな道場として高野山開創に着手する一方、最澄と決定的に決裂したことを考えると、空海が新しいステージへ立ちつつある瞬間のように見えて感動を覚えた。我々凡人にもささやかながらもそのような人生の転換点はあるからだ。



に う つ ひ め の おおかみ 空海 丹生都比売大神から高野山を授けられる

【今回登場する場所・人・神】

- ・天野の里（今回の舞台で和歌山県かつらぎ町 高野山の麓）
- ・柳沢（空海と丹生都比売大神が出会った場所 大きな柳があった）
- ・空海（弘法大師）
- ・丹生都比売大神（高野山の地主神 丹生明神 天照大神の御妹神）
- ・狩場明神（丹生都比売大神の御子神 高野御子大神 高野明神）



弘仁 7 年（816 年）4 月
空海は真言密教の道場を開くための地を探し求めて高野山麓の天野の里にやって來た。「一の滝」という所で**狩人（狩場明神）**と白黒の犬に出会った。

犬は空海を「柳沢」の地に案内した。
すると**丹生都比売大神**が現れ、狩人が御子神だったと明かし**空海に高野山を授けた**。

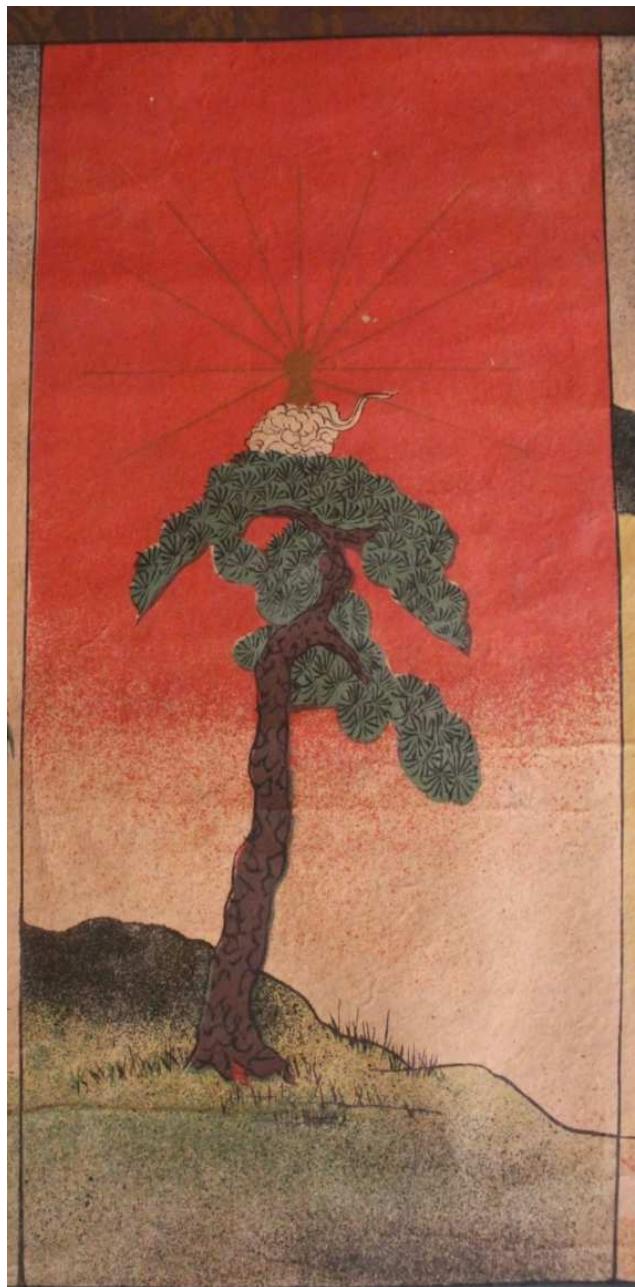


丹生都比売神社のおみくじ→



空海は二神を高野山の総鎮守・真言密教の守護神として崇敬し後に高野山に社を築いた。
また柳沢に祀られた柳沢明神も豎義(りゅうぎ)の神としてあがめられた。

この絵は柳沢で丹生都比売大神が空海に高野山を授けたことを物語っていると思われる。大きな木は柳で「柳沢」という場所を表し、鳥居は丹生都比売大神を示しているのではないか。
また柳については生えていたという事実に加えその聖性も考慮されているかもしれない。



空海 高野山で三鉢の松（さんこのまつ）発見 ～ ここが約束の地！

松の木の上で雲に乗って輝いているものは**三鉢杵**（さんこしょ）である。この絵でははっきりした姿は分からぬが、下のような形のものである。仏教の儀式で使われる道具である。



ではなぜ、松の木にこのようなものが乗って輝いているのか？
そもそもここはどこなのか？

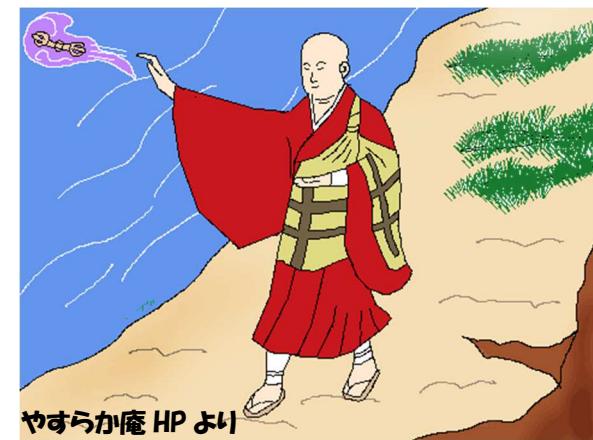
実はこの三鉢杵は中国に留学していた空海が、帰国直前（806年）に明州（現在の寧波）の港から投げたものだった。

「帰国してから密教を広めるためにふさわしい地（道場）を示したまえ」との祈りを込めて東の方角へ投げたのである。

三鉢杵は金色の光を放ちながら紫雲の中に消え、日本の**高野山の松の上**に落ちた。

そして弘仁7年（816年）5月、丹生都比売大神に授けられた高野山に足を踏み入れた**空海はこの飛行三鉢杵を発見**したのである。これにより空海はここを拠点とすることを決意した。

なおこの松は「**三鉢の松**」と呼ばれるようになったが、普通の松は葉が2本に対しこの松では3本だった。現在も高野山にあり、訪れた人が三本の葉を探しているとのこと。



やすらか庵 HPより

空海 嵐峨天皇から高野山を下賜される

丹生都比売大神に授けられ三鈷杵が落下した高野山は、四方を高峰に囲まれ、俗世間を離れた修禪道場にふさわしい地であると空海は確信した。

そこでさっそく弘仁7年（816年）6月に、朝廷（嵐峨天皇）に高野山の下賜を願う文書（上表文）を奉った。以下、その一部を紹介する。

空海少年の日
好んで山水を涉覧せしに
吉野従り南に行くこと一日
さらに西に向って去ること両日程にして
平原の幽地あり
名づけて高野という
計るに紀伊国伊都郡の南に当たれり
四面高嶺にして、
人蹤蹊（にんじゆみち）絶えたり
今思わく、上は国家の奉為（おんため）に
下は諸々の修行者のために
荒藪を芟（か）り夷（たいら）げて
聊（いささ）か修禪の一院を建立せん



左の絵はまさにこの高野山の風情を描いている。



嵐峨天皇

そして願いは受け入れられ、同年高野山は空海に下賜されて造営が始まった。これにより空海は東寺と高野山という二つの拠点を得た。前者は都にあって社会的活動を担い、後者は自身の道場としての役割を果たすこととなったのである。

以上で3点の画についての検討を終わるが、特に参考文献は無く、主に金剛峯寺と丹生都比売神社HPを参照した。また前述の北川宥智氏の講座と高橋早紀子氏（愛知学院大学准教授）の「空海と密教美術（2022）」など一連の講座への参加は予想外の相乗効果を發揮し空海の生涯や人間像・宗教活動に触れる貴重な機会となった。そしてこれが今回の考察の原動力になった。深く感謝したい。